

事業地区における土地改良事業のあゆみ

本地域の大宗をなす矢作川下流域のかんがい事業計画の始まりは、1765(明和2)年に現在の安城市和泉に生まれた都築弥厚つづきやこうが計画(三河国碧海郡新開計画)した「**明治用水**」の開削からである。弥厚没後、この計画は挫折するが、明治期に入り、岡本兵松おかもとひょう、伊豫田与八郎いよだよはちろうらによって、弥厚の意思が受け継がれ、1880(明治13)年、現在の**明治用水頭首工**から約2km上流に割石や杭による井堰・導流堤を有する新水路(現**明治本流**)が完成する。

完工式には当時の総理大臣、愛知県知事も参列し、盛大に開催されたと伝えられている。その後、**東井筋**、**中井筋**、**西井筋**の順に各井筋の開削が行われ、明治14年に総延長約52kmの水路が完成し、元号を冠する「**明治用水**」が誕生した。

それにより当時、「不毛の台地」と呼ばれていた「碧海台地(“安城が原”とも言った)」は、水田として次々と開墾され、現在の農業生産の基盤が形成されていった。



三河国碧海郡新開計画



旧頭首工

しかし、開削当時の井堰・導流堤はその築造材料や構造などから破損事故が多かったため、明治42年、現在の明治用水頭首工の約400m上流地点に当時の最新技術を導入し、堰堤が新たに築造された。この堰堤には、当時としては堅硬な材料であったと考えられる**人造石**(服部長七の発明)はっとりちやうひちが用いられた。

本事業の明治地域では、戦後「**国営明治用水農業水利事業(S22～S32)**」によって、現在の**明治用水頭首工**が完成するとともに、県営事業により昭和43年までに約85kmの用排水路が、石積み水路から鉄筋コンクリートに改修された。

その後、高度経済成長期に入り、生活用水、工業用水、電力等の需要増加に対応するため、矢作川総合開発事業が始まり、昭和46年「**矢作ダム(多目的ダム)**」が完成する。



明治幹線管水路工事(安城市里町)

このダムの水を利用して「**国営矢作川総合農業水利事業(S45～S63)**」が始まった。同事業では明治用水の**管水路化**が図られ、自然圧を利用した末端ほ場までのパイプライン化が可能となるとともに、明治用水頭首工**水源管理所**からの**遠方監視制御**等により水管理の合理化が実現した。管水路化された水路の上部は、県営事業などによって**サイクリングロード**や**遊歩道**などに整備された。

さらに同事業によって、本事業の北部地域では、明治用水頭首工から約30km上流の**百月ダム**地点に**岩倉取水工**とこれに続く**北部・豊田幹線水路**を新設し、農業用水が畑地等を含め約680haの農地に安定的かつ効率的に供給されている。なお、この間、明治用水頭首工は「**国営造成土地改良施設整備事業(S53～S58)**」により、魚道や護床工などの施設の一部改修が行われた。